慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エッセイ：社会学研究科と教育学専攻と私
Sub Title	Essay : The division of human relations, the department of education, and I
Author	斎藤, 幸一郎(Saito, Koichiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1993
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.36 (1993.) ,p.7- 11
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	30周年記念号
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000036-0007

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エッセイ　社会学研究科と教育学専攻と私

Essay:—The Division of Human Relations, the Department of Education, and I.

斎　藤　幸一郎*

Koichiro Saito

1. 社会学研究科教育学専攻不在時代

私が文学部助手に採用されたのは昭和 25 年 6 月であった。そして，記録を調べてみると，新制の大学院社会学研究科はその翌年，昭和 26 年に開設されていたはずなのであるが，助手になりたての当時の私にとってはすべては雲の上の出来事であり，しばらくは研究科委員長が誰であるかというようなことさえも全くの関心の外のことであった。

また，他の研究科はすべて，例えば文学研究科が文学部を母体としてその真上に置かれているように，学部の上に乗った形になっており，名称も学部と同じ名称を冠した研究科が開設されていたのに対して，なぜ社会学研究科だけがあえて特定のひとつの学部を母体とせずに形成されることになったのか，その辺の理由が何であったのかというようなことも，当時の私には知る由もなかったわけである。当時ばかりではない，実は，今になってもこれについては真の理由はわからずじまいのままになっている次第である。

そんなわけで，社会学研究科について私が当時持っていた知識といえば，その研究科には，社会学専攻と心理学専攻という 2 つの専攻が属しているということぐらいのものであった。それと，もうひとつ印象に残っているのは，「大社」という省略語が，別段，官幣大社とか出雲大社といった言葉を連想したからというわけでもないが，少なくともはじめのうちは何となく奇妙な感じであったということぐらいである。そういえば，省略語として「大社」と言わずに「社研」という言い方をする人もいたし，その言い方が現在も通用しているのも同じ理由からではないかと思う。

そんなわけで，私自身が助手，専任講師，そして助教授の前半であった頃までの社会学研究科は，残念ながら私からみて，日本の歴史でいえば神武天皇以前，つまり，「神代」の時代と同様，曖昧模糊としたかすみの中にあった。こうした無関心さは，もちろん，私の持ち前の性格からのものであることもたしかであるが，その上，それに拍車をかけていたもうひとつの理由は，助手に就任するについて私が所属した教育学専攻が，その頃はまだ，社会学研究科の仲間に入っていなかったからでもある。そんなわけで，その頃の私は助手としてであれ，専任講師や助教授になってからであれ，ほとんど全面的に 4 年制大学の学部の教員としての研究と教育にたずさわっていたのである。教育学専攻は大学院生というものをひとりもかかえていない専攻であったから，三田に属する若手教員でありながらそれで済んでいたし，それが当然の過ごし方であったわけである。

また，私どもが，大学院に対して無関心であったさらなる別な理由は，やはり，その頃はまだ，本誌『社会学研究科紀要』が発刊されていない時代であったからである。もしもこの『研究科紀要』がその頃から刊行されていたなら，私のような者でも，助手の頃から，当時の研究科に関して学問的関心が広がっていたのはもちろん，雲の上での出来事にもせよ，もっといろいろと様子を知ろうという動機づけが与えられていたにちがいないと思うのである。

もちろん，当時，私たち教育学専攻のメンバーが所属する学内学会がなかったわけではなく，私たち文学部哲学科（当時は哲学科には，哲学・倫理学・美学・社会

* 慶應義塾大学名誉教授
昭和 62 年 3 月定年退職，常磐大学教授．

学・心理学・教育学の6つの専攻が属していた）に所属するメンバーは全員，大正 14 年以来（『哲学第 91 集』の巻頭言に小泉　仰教授が『哲学第 50 集』に書かれた故橋本　孝教授の記述として紹介している）の長い歴史と伝統にかがやく三田哲学会のメンバーであったし，その後もその会員であり続けていたわけである。私個人についていえば，たびたび開かれていた三田哲学会例会に出席してそのたびに狭い専門領域を超えた諸問題に関し貴重な学問的刺激を受けていたし，また，昭和 29 年 3 月に出た『哲学第 29 集』には，私がまとめた論文が掲載され（それがわが生涯における学術論文第 1 号となった），はじめて書いた論文が活字になって実にうれしかったことなども思い出すのである（私はいわゆる学徒出陣組で，旧制大学本科 3 年間のうち 2 年足らずしか経過していなかった昭和 18 年 12 月 1 日付で，私の場合は陸軍航空隊の整備兵として軍に入隊し，軍籍にあったまま昭和 19 年 9 月大学卒業ということになってしまったジェネレーションであり，したがって卒業論文など，書くどころではなかったのである）。

2.　教育学専攻が仲間入りした頃

ところで，社会学研究科の話題にもどると，やがて，私から見ての「神代」は 10 年で終わることになる。というのは，これまで社会学専攻と心理学専攻の 2 専攻であった研究科の修士課程に，新しく，待望のわが教育専攻が加わったのが，昭和 36 年 4 月からであったからである（博士課程にも教育学専攻が置かれたのはその 2 年後の昭和 38 年 4 月からであった）。

そしてそのとき，西谷謙堂教授が研究科委員長に就任されたのであるから，私に言わせれば，西谷教授は，実に神武天皇に相当するわけである。その頃は，小林澄兄名誉教授も御健在であったがすでにいわゆる現役ではなく，当時の現役の教育学専攻担当メンバー中の最先任教授ということで西谷教授が委員長に選任されたのであろう。

そういえば，昭和 35 年の頃，当時助教授であった私が西谷教授の書記役として，やがて大学院に仲間入りする予定の教育学専攻の学則（案）の作成事務その他のお手伝いをしたことを思いだすのである。そして，特に印象に残っているのは，教育学専攻の場合，修士とか博士とかの称号の名称をどうするか，ということであった。これについては，西谷教授からの「ご下問」に応じて，私は，私なりの考えで，教育学専攻なのだからそのまま教育学修士と教育学博士とするのがいいのではないかと答えたのであった。今でこそ，教育学修士とか博士というような言い方は日本中，そして世界中に，大手を振って通用しているのであるが，30 年以上も昔の当時にしてみれば全く耳馴れない言葉で，奇異な感じを抱く人も大いにあり得たのであった。しかし，その名称の案は，その後，研究科委員会の席でどれだけ論議のやりとりがあったか知らないが，原案通りパスし，大学評議会もパスして，本決まりとなっていったわけである。もちろん，私が歴史をつくったなどと思っているわけではないが，教育学修士とか教育学博士というまだ一度も聞いたことのない言葉を，少なくとも本気で最初に，私がそのとき「発声」したのであったことだけは事実なのである。

さて，教育学専攻が仲間入りするに際しては，その年以前から，西谷教授以外に，兼担者としてではあったが山本敏夫教授も授業担当メンバーとなっていたのであるが，この年から，そのお二人のほかに正式に中山一義教授と村井　実教授が社会学研究科委員会のメンバーとなった。そして，助教授の私自身も，西谷教授と共担の形で修士課程の授業担当者の仲間に加えていただくことになった。

なぜ，この時点までの 10 年間，教育学専攻が社会学研究科に所属し得なかったのかと言えば，その理由は単純である。上記のように，その頃までの期間，教育学教室には専任の教授クラスの教員スタフの数が十分でなかったからである。どうも，大学の教員系の採用人事というものは，必ず助手から採用するときまっているわけでもなく，そのときにたまたま適任者がいるかいないか，その人の直接的な専門は何か，年齢的に若手クラスか教授クラスか，といった不確定要素によって左右されることが多く，公務員や会社員の採用のようにスケヂュール通りには運びにくい要因をかかえている。そのために，しばらくして分野別にみると，人口比が，ある期間は長老にかたよっていたり，ある期間は若手の方にかたよっていたりしがちである。つまり，私から見ての「神代」の頃は，教育学教室には私をも含む若手の方にかたよった人口比となっていたのが，ようやくその時期を脱するところに到達したわけであった。

このようにして，神武以後になった。そして，私からもいくらか物事がはっきり見えてくるにつれて，まず驚いたことは，そこには，文学部の社会学や心理学の分野の恩師や先輩の先生方がおられるだけでなく，経済学部や法学部の錚々たる長老教授の方々も何人もメンバーになっておられたということである。ちなみに，その年つ

まり昭和 36 年度の教職員名簿によって，大学院社会学研究科担当の専任の教授の氏名を順不動に，というよりも何の順かは知らないがともかく教職員名簿にのせられてあった順に列記してみると，奥井復太郎，小島栄次，米山桂三，有賀喜左衛門，生田正輝，横山松三郎，佐原六郎，西谷謙堂，小川　隆，林　銈蔵，印東太郎，中山一義，村井　実というように，今にして思えば，すべて私にとってこの上なく懐かしいお名前が並ぶのである。

但し，この中で，生田正輝教授（今は名誉教授）だけは別段懐かしいというわけではない。というのは，生田さんは，私が慶応義塾大学定年退職（昭和 62 年 3 月）後ずっと奉職してきている水戸の常磐（ときわ）大学人間科学部の学部長であり，したがって，現在も毎週のように何回かお会いしている間柄だからである。ついでながら，余談になるが，その常磐大学というところには，生田さん以外にも，現学長もそうであるが，慶応での先輩や後輩であった方々が大勢在任しておられ，その点，私にとって気楽に過ごすことができる実に有難いところである。もうひとつ言えば，たまに何かのことで三田に顔を出したりすると，定年制完全実施の慶応義塾だけあって誰に会っても私の方がたいてい年寄りの立場であるのに，常磐大学に行くと 70 歳の私でもまだまだ若手(?)に属するというわけで，その分だけさらに気楽でいられるようになっているという次第である（相手より自分の方が年上だとかえって気を使う，ということに最近あらためて気づいたのであるが，これはなぜだろうか。相手から，トシになったのでボケた，などと思われまいと努力して，無理に構えた過ごし方をしているからかも知れない．実はそうしていること自体トシになった証拠なのだが，である)。

3.　社会学研究科紀要の発刊

さて，またも脱線しかけた話をもとにもどすと，教育学専攻が社会学研究科に仲間入りした翌年の昭和 37 年 6 月に，本誌『社会学研究科紀要』の第 1 号が発刊されたのであった。その第 1 号の編集後記に佐原六郎教授が書いておられるところによれば，社会学研究科発足以来 10 年間の間たえず紀要の発行を念願していたにもかかわらず，それが実現されなかった理由は 2 つある，ということであった。そのひとつは，社会学研究科関係の教員は，ご自分の所属学部がどれであるかによって，『哲学』，『史学』，『三田学会雑誌』，あるいは『法学研究』などの中のどれかにご自分の論文を発表することが可能であるということ，そしてもうひとつは，社会学研究科の歴史が浅いために，十分な数の購読者としての学生数が確保できず採算的に問題があるから，というわけであった。しかし，いまや教育学専攻が加わってこれまでの 2 専攻体制が 3 専攻体制という完成された形となり，その編集後記での佐原教授の述べ方によれば「……今日ではもはや年々少数ながら増加していく新進の学徒に研究発表の機会を与え，また当研究科の学事を報告するための紀要発刊をこれ以上遷延させることを許さなくなった。そこでいろいろな困難を克服し，塾当局の援助を得て紀要出版を企図し，編集委員を依嘱して準備を進め……」といった努力の結果，『社会学研究科紀要創刊号』が誕生した次第であった。ちなみにその創刊号を生み出した編集委員は，編集後記と同じページに記されてあるが，それをそのままここに転記すれば，横山松三郎，佐原六郎，米山桂三，十時厳周，大日向達子，山岸　健，佐藤方哉の 7 名の方々の名が見える。この創刊号はわが教育学専攻が仲間入りした当該年度での編集によるものなので，この時点ではまだ，わが教育学専攻所属のメンバーは，編集委員として参加していないが，それであるからこそかえって，それらの創始者の方々に対して，いま改めて感謝の念を禁じ得ない次第である。

ところがその翌年，昭和 38 年 3 月に刊行された第 2 号となると，早速，編集委員長は教育学専攻所属の西谷謙堂教授となり，編集委員の顔ぶれも大きく変化し，西谷教授を含め，有賀喜左衛門，青沼吉松，山岸　健，小川　隆，佐藤方哉，小谷津孝明，村井　実，井上　坦の 9 名の編成となっている。つまり，各専攻からの 3 名カケル 3 専攻で合計 9 名という体制である。しかも，偶然の一致であろうが，この第 2 号では論文執筆者も各専攻からの 3 名づつカケル 3 専攻で 9 名となっており，その点，わが教育学専攻はここで，他の 2 専攻と完全に「肩をならべた」(?) ことになる。そして，その教育学専攻からの 3 名の執筆者は，中山一義教授，修士課程在学中の太田垣幾也君，そして当時助教授であった私とであった。

尤も，その頃の各専攻への入学定員は，各学年，修士課程では，社会学専攻 25 名，心理学専攻 5 名，教育学専攻 10 名であり，博士課程では，社会学専攻 3 名，心理学専攻 2 名，教育学専攻（昭和 38 年 4 月から開設）3 名となっており，3 専攻の間で所帯の規模などが同じではないので，その後は必ずしもこの第 2 号の場合のように何もかも 3 専攻で 3 等分，というわけにはゆかないことになってゆくのも当然のなりゆきであったわけである。(上記の入学定員は，その後，修士課程については

平成3年度現在まで変更なくそのままであるが，博士課程については何時の頃からであったか社会学専攻のみ 6 名に変更されている。)

それから，この第2号の執筆者の傾向として特に目立つことは，上記 9 人のうち，4 人までが，慶応義塾の専任教員スタッフではなくて，社会学研究科に在学中の院生か，最近単位終了した若い研究者である，ということである。これは，創刊号の編集後記で佐原教授が述べている「……新進の学徒に研究発表の機会を与え……」という基本構想がそのまま具現化された現象に他ならず，『哲学』などの古くからあった雑誌に較べて，新機軸といえるほどの新しい特徴であって，この特徴は，第 3 号以後も連綿とうけつがれて今日に至っているのである。

4. 教育学修士と教育学博士

ところで，この第2号の巻末には，社会学研究科発足以来昭和 37 年 3 月までの 10 年間に学位を授与された研究者の氏名と論文題目が掲げられているが，社会学専攻からの修士（社会学修士）が 31 名，心理学専攻からの修士（文学修士）が 36 名，そして，論文提出による心理学専攻からの博士（文学博士）が 2 名となっている。すでに述べたように教育学専攻が社会学研究科に仲間入りしたのが昭和 36 年 4 月であったから，当然この時点まではまだ学位を授与されたものはいない。

紀要の第 3 号は，昭和 39 年 3 月に発行されているが，この号からは，その年度における学位取得者の氏名と論文題目が掲載されるようになった。ちなみに，この年つまり昭和 38 年度の場合には，社会学専攻からの修士（社会学修士）が 5 名，心理学専攻からの修士（文学修士）が 3 名，そして，この年度にはじめての教育学専攻からの修士（教育学修士）が生まれたのであったがその数は2名であった。ついでながら，その後のことになるが，新制大学院になってはじめて教育学専攻からの博士（教育学博士）が生まれたのは昭和 46 年度（はじめての社会学博士は昭和 40 年度，はじめての心理学専攻からの文学博士は昭和 36 年度）であった。そしてまた，今日までの 30 年間についていえば，大学院教育学専攻で平成 2 年度までに学位を取得した人数は，平成 2 年度版の慶応義塾年鑑によると，教育学修士が 182 名（内女子が 59 名）であり，教育学博士が 11 名（内女子が 2 名）となっている。

教育学専攻は，他の 2 つの専攻より 10 年おくれて出発したのであったが，それでも今日まで 30 年の歴史があり，その間，単純に平均すると，毎年約 6 名づつの教育学修士を生み出し，3 年につき 1 名づつの教育学博士を生み出してきた計算になる。ひと口に 30 年というが，実に内容の重い歴史であったと思うのである。

5. 忘れ得ぬ思い出とむすび

さて，あとは，さらに 2 つ，私として忘れ得ない個人的な思い出を付記した上で，本稿のしめくくりを述べて終わることにしたいと思う。

私が教授に昇任したのは，昭和 40 年の 4 月であった。したがって慣例によって，その翌年，昭和 41 年 4 月から社会学研究科委員会のメンバーに加えていただいたのであったが，当時は，教育学専攻関係だけでも私の先輩の先生が 4 人（前述）もそろっておられたので，研究科委員は教育学所属者だけで 5 人になった。つまり，その頃以後しばらくの間は，まだ定年制完全実施にまで至っていなかったという事情もあって，教育学専攻スタッフの年齢構成は，若手少数で長老多数という傾向の時代であったわけである。それで，私などは，研究科委員になったといっても気楽な立場にあったわけである。

しかし私は，むしろそれよりもその前年，教授になると同時に永澤塾長内閣（?）から学生部長という役職に任命されており，そちらの方の馴れない仕事に心を奪われていたのである。当時は全国的な，というよりむしろ世界的な，いわゆる学園紛争時代に突入しており，特に昭和 43 年には，慶応義塾でもあのはげしい米軍資金導入反対紛争があり，学生によるストライキ，日吉キャンパスのバリケード封鎖，塾監局占拠などが続き，学生部関係者だけでなく，塾内の全教職員がその対策に忙殺される日々を過ごしたのであった。学生部長であっただけにそうした経験は，私にとっては，慶応義塾大学在任中の最も峻烈な思い出となっているのである。

もうひとつ，特記すべきこととしては，これも学生部と無関係ではないのであるが，私も学生相談室のカウンセラーのひとりになったことである。もっと以前，つまり昭和 32 年頃，学生部の発想で，はじめはインフォーマルな形でまず日吉キャンパスに学生相談室をつくることになり，たまたま当時私が文学部から指名された学生部副部長であるし，たまたま教育心理学をやっている人間であるということで，早速，私がそこのカウンセラーをやったらいいということになったのであった。しかし，私ひとりではどうにもならないし，ということで，私としては，私の直属上官（?）の西谷教授に相談したり，学生部にいた平野　馨君に協力を求めたり，塾出身者でガリオア奨学生としてアメリカに留学し，カウンセ

リングを学んで来てから，武蔵工大の専任教員をしていた山崎恒夫君に兼任の形で来てもらうことにしたりして相談室が少しずつ充実していったのであった。そして，ようやく昭和 35 年になって，正式に学生相談室が制度化され，当初の相談室長が西谷教授，その西谷教授が社会学研究科委員長になった昭和 36 年度からは，林　銈蔵教授が相談室長となり，私も，平野　馨君とか山崎恒夫君たちと共に正式にカウンセラーという名の役職を引き受けることになった。そして昭和 38 年 4 月には『慶応義塾学生相談室紀要第 1 号』が発刊され，私もその編集に参加しただけでなく，カウンセリングに関するはじめての論文を寄稿したのであった。

なぜこうしたことが，私にとって，特記すべきことなのかと言えば，カウンセラーという役職を引受けたためにカウンセリングの勉強をせざるを得ないめぐりあわせになり，それがその後の私個人の「学風（?）」を，徐々にではあるが，変化させる上での大きな原動力となったからである。それがどのような変化であったのかを最も端的に一言で言ってしまえば，「行動主義心理学的」研究姿勢から「意識を真正面に据えた」研究姿勢への変化であったのである。

ところで，実は，私は，30 年間の歴史をもつこの社会学研究科紀要に論文を寄稿したのは前記の第 2 号に載ったもの 1 篇のみである。その点まことに恐縮であるが，あえて言い訳をさせて頂くなら，その第 2 号が出た頃を境として，私の立場で寄稿しなければならない出版物も増えたし，また頼まれて書かなければならない原稿も急に増えたということで，本紀要に自分から寄稿しようとするだけのゆとりのないままに 30 年間を過ごしてきてしまった，ということである。現に，私自身のメモをひっくりかえして見ても，前述した学生相談室紀要第 1 号が発刊されてそれにも論文を寄稿しているのは，論文を本誌第 2 号に寄稿したその同じ年であったし，その後学生部長になってから以後は，学術論文とは言えないが，それでもその度に，場合によると単純な実験報告の論文などよりもかえって頭をなやましながらようやく仕上げなければならないような依頼原稿を，今になってわれながら驚くほどつぎつぎと書いていた，というより書かされていたのであった。また，学術論文について言うなら，同じ学内の研究誌でも，その後変化した私個人の「学風（?）」からして，『社会学研究科紀要』よりも『哲学』や『学生相談室紀要』の方に寄稿する方が適しているというようなこともあったり，また，自分の著書や，外部の学会誌のための原稿書きに忙殺されたりもしていたというわけである。

しかし以上のような私個人の例は別として，最後にここであらためて本誌の存在価値を見直すなら，この 30 年間に本誌の果たしてきた役割は実に大きなものであったと思うのである。特に，すでに引用した第 1 号編集後記での佐原教授の「……新進の学徒に研究発表の機会を与え……」という趣旨がそのまま 100 パーセント実現されてきたところに，本誌が果たしてきた最も大きな功績があったと考える。本特別号では，巻末に創刊号以来の掲載論文の総目録が収録されるとのことであるが，おそらく，その中の相当部分が「新進の学徒」によるものであろうし，そういう方々にとっては，ご自分が書いてはじめて印刷物となり世に問うた学術論文ということで，それが，その後現在までの，そしてまた今後の一生にわたる研究者としての生活へのこの上なき強力なエネルギー源となっていることであろうと想像し，この 30 年間の歴代の編集担当の方々に対し心から感謝申し上げて筆を置く次第である。〔完〕